

# 璉城寺通信

第68号

2022年1月1日

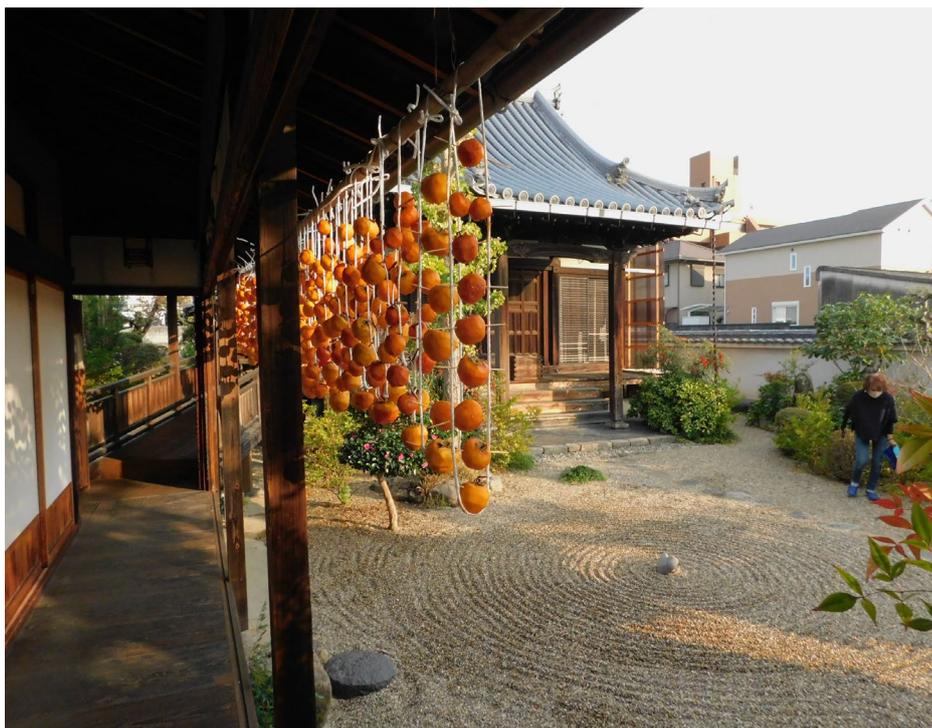
璉城寺通信編集委員会

〒630-8307

奈良市西紀寺町45番地

TEL

0742-224887



幸 柿すだれ 古寺を寿ぐ 観音 弥陀

明けましておめでとうございます

今年こそ、良い年でありますように、そして皆さま  
のご活躍とご健康をお祈りします。

下間景甫

恒例の年越し念仏会には、新しい方のご参会もいただき賑やかに新年を迎えました。

念仏会の後、健康でこの日を迎えられたことに感謝しながら皆様と年越しそばをいただきました。もちろん祝酒もいただきおしゃべりに華が咲きました。

振り返ってみますと、昨年もコロナ、コロナで、世の中の常識や諸々の動きが変わった年でした。ワクチンを必死になって受けた記憶があります。そのワクチンの接種率が高くなり、感染者も大きく減って、これでやっと収束するのかなあと思っていたところに、第4種のオミクロンという新種が出てきました。いったい、いつになれば今まで通りの生活に戻ることができるのでしょうか。3回目のワクチン接種の連絡を待っている状況です。

年中行事では、毎月の「京終さろん」は一昨年9月からリモート配信として再開し、お寺（会場）に集まるのは30人限定ですが、毎月かかさず実施しています。皆さんから内容が充実していると好評をいただいています。有難いことです。



毎月第2・第4金曜日  
午後1：30～2：30  
講師は遠藤美佐緒さんです  
参加費1000円

毎月二回のヨガも続けています。

「大人のお月見会」は残念ながらこの時世で決行するわけにはいきませんでした。今秋こそ皆さんと一緒に名月を眺め、美酒を味わいたいです。

11月の専修念仏会は、遠方からのお参りをいただき、満願の日を迎えることができました。有難いことです。

お念仏会を終えると、次は干し柿づくり！ 今年の柿は豊作でたわわに実りました。さっそくお手伝いをお願い電話をさせていだいたところ、快いご返事をいただき、当日は10人もの方が自前の包丁をもって参加してくれました。本当に仏様の

ご加護を感謝せずにはおれませんでした。

マツリカ歌声も再開しました。久しぶりだから、皆様の参加が心配でしたが、「やっぱり声を出して歌いたい」と集まり、コロナで鬱積した気分を発散させたかのようにでした。この歌声は毎月第3火曜日13時30分からです。どなたでもご参加いただけます。

「マツリカ句会」も順調です。倉橋みどり先生のご指導が楽しく、まるでテレビで放映されている夏井さつき先生のようなんです。

新聞にこんなことが載っていました。人生に大切なのは「かきくけこ」・・・と。

「か」は、感謝と感動

「き」は、緊張

「く」は、くつろぎ

「け」は、健康と決断

「こ」は、好奇心

なるほどと思いました。確かにこの精神で生活すれば、すべて行き届く！ 今年目標にしたいと思いました。

今年も皆様の支えをいただき、お寺をお守りしていきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。 合掌



## 京終さろん



10月例会もコロナ対策のオンライン方式。講師は依水園美術館理事、元・平城遷都1300年事業で璉城寺もお世話になった「祈りの回廊」を担当された渡辺弓雄さん。テーマは「**展覧会から祈りの回廊へ**」と題したお話でした。

渡邊さんの経歴は、1954年北九州市出身、朝日新聞社入社。2003年退社するまで新聞社の文化事業として全国各地の博物館と協賛し仏像・美術品などの展覧企画を担当されてきました。

これはこれで貴重な財産ですが、今回の主題は退職後の活動です。次のようなお話です。

そもそも博覧会のルーツは、神社仏閣の仏像や宝物の「秘仏」として開帳されたことであって、文献では「明月記」に1235年（嘉禎元年）京都市内で善光寺の秘仏を拝礼したとか、南北朝時代の「増鏡」に伊豆の不動尊が33年ぶりに開帳したなどの記録がある。

開帳を詳しくみると、通常開帳はその所在地で開くものを「居開帳」というが、神社仏閣の開帳の多くは出張して展示された「出開帳」であり、数か所を巡回する「回国開帳」という方法もある。

江戸時代にはいると「居開帳」「出開帳」ともに、江戸、京都、大阪などで盛んに行われた。その背景には交通手段の発達があり、疫病退散を

願う將軍をはじめ庶民の願望とともに、提供する側では宝物の修理、保全対策費用の調達という利害の一致もあった。

さて、「祈りの回廊」事業が始まったのは、平城遷都1300年を記念する事業協会が中心になったものですが、その前例が昭和40年から始まった京都古文化保存協会の寺社の秘仏・宝物の展示でした。その取り組みには京都に多い大学生の協力があり、これを奈良でも生かせないかと考えて奈良大学・奈良女子大学へ日参し、「南都古社寺研鑽会」の結成にこぎつけた苦労話。

その事業が「ナント・奈良応援団」や「奈良市生涯学習財団」などの協力を得て「祈りの回廊」は今もつづいています。その参加寺社は特別開帳54社寺、講話38社寺となり、参拝者は2倍〜10倍にもなっているとのことです。

.....



十一月・第97回京終さろんは、

**徳融寺・阿波谷俊宏さんの「絵解き融通念仏宗縁起」**がテーマ

でした。以前「さろん」では徳融寺さんの本堂で縦3メートルもある大きな「曼荼羅」の解説をお聞きしています。今回は阿波谷さんの二回目の自寺秘宝のお披露目です。

ご本人がお書きになった「絵解き融通念仏縁起」が奈良新聞社出版されています。

オンラインに加えてこの本も参考にさせていただきます。

「絵解き融通念仏縁起」とは、融通念仏宗の開祖・良忍上人の行跡と念仏の霊験を綴った上下二巻の絵巻物です。会場の璉城寺の庫裏に幅一メートルほどの巻物がセットされました。これは下巻のみで全巻は30メートルになるとのことです。

奈良時代の六宗（法相宗・華嚴宗・律宗・三論宗・俱舍宗・成実宗）は平安時代にはいつて、最澄の開いた天台宗、空海の真言宗が開かれます。融通念仏宗はこれにつづいて良忍上人が開いたものです。

良忍上人は比叡山で天台宗の円仁から「声明」を学び、西麓の大原の里で修行を続けました。いま三千院の奥にある滝の前で声明を唱えると水音が消えたと「音無の滝」の由来につながる名僧です。

さて、会場にセットされた絵巻物の最初に出てきたのが、「木寺の源覚僧都の牛飼いの童の妻女、難産によりて死すへかりしか、この念仏衆に入りて命をのびにけり。これをききて念仏に入るもの272人なり」とあり、つぎに「北白川の下僧の妻は念仏によって閻魔庁より返された……」など、つぎつぎに入信する事例が紹介されています。

また、全国で疫病が流行ったころのこと。武蔵の国与野郡（さいたま市）の信心深い名主（庄屋）が身内の者をさそって別寺念仏会を催すことにし、参加者の名前を「番帳」に書きつけた。その夜、不思議な夢を見た。疫病神が門前までやってきて押し入ろうとする。名主は「明日から別寺念仏をはじめ。『番帳』もできている。一步も入るな。帰れ」と追い払った。疫神の頭が「念のためその番帳をみせよ」とすごんだので名主は番帳を疫神に渡した。その結果、周辺の村では疫病が蔓延したが、別寺念仏に参加した人たちは無事だったとのこと。この不思議な出来事の紹介文とリアルな絵によって布教活動が行われたのでした。融通念仏宗の本山は大阪平野の大念仏寺ですが、寺は奈良県に多いそうです。

12月第98回京終さろんは、

「風の森・奈良から始まる日本酒造技術の前衛を目指す」と題して油長酒造（株）の山本長兵衛さんのお話でした。



「長兵衛」という昔風のお名前からお年寄りかと思っていたら、なんと40歳の若者でした。もちろん「長兵衛」は先祖から名前であつて、2016年「油長酒造」の社長に就任した時に襲名したそうので、13代目の当主（社長）です。

話の内容はテーマの通り、清酒の発祥は奈良の正暦寺であり、長い歴史のある技術を受け継ぎ、その伝統を守り新しい酒造りを目指しています。

と、その取り組んできた実績と今後にかける心意気が熱く伝わるものでした。

正暦寺は菩提川の源流に一条天皇が創建した寺院。谷川の水は天然の乳酸菌を含んでいるそうです。昔の酒は「どぶろく」ですが、室町時代に白米からつくった麴と蒸し米を混ぜる「諸白」「菩提泉」として全国に広がりました。それには「火入れ」して発酵を抑える技術改革があつたこと。壺から木樽へ醸造容器を大きくしたこと。醪と白米の混合、漬け込みを二回、三回と「段仕込み」へ改良し大量生産が可能になったことでした。

ところで油長酒造は、初代・山本長兵衛秀元が次男であつたため本家

の菜種油の製造業とは別に正徳2年（1712）ごろに酒造りを始めたのが起源とのこと。「油長」の屋号の由来です。

御所市は金剛山の麓。その13代現社長の長兵衛さんは、父の代に開発した「風の森」を続けながら新たな酒造りに挑戦しています。「風の森」とは地元で獲れるコメと超硬質の深層水で醸造し、火入れせず、濾過もしない生酒です。この製法は従来の酒造りとちがいます。通常、清酒の仕込みは冬ですが「風の森」は四季を通じて醸造し、冷蔵技術の進歩によって保存と輸送が可能になったのでした。長兵衛さんはこの技術をさらに「ジン」製法に活かして、大和野菜・果樹を取り入れた新品種を造り出しているとのこと。社長も若い社員も若く、20歳代の社員がその任務を担っているとのこと。長い酒造りの伝統の上に新しい味が生まれるのは楽しみです。

.....



## マツリカ句会

十月例会より

（作者不詳）

古寺に萩砂紋に色落としけり

ほおづえのあとに涙のこぼれ萩

大ぶりに松茸を割く笑顔かな

朝風に髪梳く如く萩靡く

秋扇そつと開けば潮の香よ

寒椿 観音様の笑みの先

秋桜や古刹が映える時を待つ

この秋はひとりで来ると決めた古寺

合掌す祖父の手祖母の手秋の夕暮れ

## 帝王本紀

橋本健一（名古屋市長）

『日本書紀』欽明天皇二年三月条、「帝王本紀」には古字が多くて読みにくい」との記事が載る。この本の書名は出処不明であり、まさか次の条文から抜き取ったのではあるまい。

『後漢書』班彪列伝・第三十

「司馬遷、帝王を序すれば則ち本紀と曰ふ」とある。

『史記』秦始皇本紀 第六においては「帝王」なる語句は「帝王の都」「帝王の万世の業なり」で載る。

『莊子』天道（紀元前三〇〇年代）

「それ帝王の徳は天地を以って宗と為す」が初出である。

司馬遷本人は『史記』の「太子公自序」に「…十二本紀を著す」と書くが「本紀」なる意味について何も述べていないし『帝王本紀』という固有名詞は『史記』には見られない。

『管子』聞（紀元前六〇〇年代）

「およそ朝廷に立てば問うに本紀あり」が初出である。「本紀」とは帝王の事跡を記録した部分である。「本紀」について五世紀の南朝宋の人、裴松之史自伝に曰う。天子は本紀と称し諸侯は世家と曰う。本は其の本系に繋がり故に本と曰う。紀は理なり。理は衆事を統べ、之の年月に繋げ、之を名付けて紀と曰う」と述べる。

果たして天皇が御覧になった欠史初代天皇はどなた様であったのか。そして神武以来の欠史天皇達が『日本書紀』のままに載っていたのか。また真の初代天皇が明確に記されていたのか。欠史の捏造の経緯は何なのか。

『日本書紀』には欽明・敏達両天皇の幼名が記載されなく『帝王本紀』には、後々に、祖の幼名が書かれていたはずである。「帝王本紀」こそ本

邦初の記録本であり、これらが推古二八年録の『天皇記』に受け継がれていたのだろう。『天皇記』に「帝王本紀」の成立時についてかいてあったのか。

『積日本紀』に引用した逸文『上宮記』に継体天皇の五代前からの系譜が記されているから継体の帝王としての書き出しを崩年の西暦620年の約90年前である。継体天皇の系譜に、もしかすると五代前の人物をして「凡牟都和希」そのまま書かれていたかも。

『史記』の「本紀」に倣い『帝王本紀』なる署名にて記録を作成し、そして「帝王」と書かれるのは「天皇」号を用いられていない時代でもある。

『日本書紀私記』条文の「天皇勅阿礼使習」の次に「いとへん」ではなく「ごんべん」での「記」字が付く「本記」に『帝王本紀』と書かれるのは阿礼の時代まで彼の『本記』なる本が存在していたらしい。

それは『本朝書籍目録』なる古代から著された書物を分類して示した図書目録に『帝王本紀』が記載されているからである。



「日本書紀」編纂を主導した藤原不比等の顕彰碑。奈良・鴻池公園にあり。

璉城寺の謎とロマン

## 藤にからまれた木は枯れぬる

野尻幸男

都が奈良から長岡京へ。そして、さらに平安京へ移ると、古都奈良の街は東大寺と興福寺以外さびれたということだ。

そうすると、大仏開眼供養（752年）のところに竣工した璉城寺も例外ではありえなかったことだろう。100年後の貞観年間（860年代）に「廃れた寺を紀有常が再興したので『紀寺』と呼ばれた」と多くの文献は書いています。しかし、紀有常が再興したから「紀寺」になったというのは誤りで、「紀寺」は璉城寺創建以前に、藤原京から平城京へ移ってきた寺であり、都が移っても「紀寺」は長岡京でも平安京でも根を張って法灯を守りつづけてきました。抜け殻になった元の奈良の街に「紀寺郷」とか「木寺村」の地名を残ったのはどうしてなのか。親しみやすい寺名のせいではないでしょうか。

一方、璉城寺はどうなったのでしょうか。

紀椽媛を母とした光仁天皇が即位した直後から息子の桓武天皇の時代にかけて、紀氏一族の多くの人物が朝廷に仕えています。たとえば、延暦元年（782）の正月の叙位では、紀船守（従三位・近衛中将）を筆頭に20人近くが昇殿の資格を持つ従五位下の位に達していました。男性だけではありません。天皇の側近に仕える女性たちの活躍もあって紀氏一族は栄光の時代を迎えています。

また平安時代の末期・延久2年（1070）の「興福寺雑事帳」には、天理市内に「蓮城寺田」があったと記録されていますが、これも都が奈良を離れて町が寂れた時代でも寺を堅持していたことを示すものです。

### 藤原氏との係わり

ところで、平安時代に書かれた『大鏡』に注目すべき記述があります。

「藤かかりぬる木は枯れぬる物なり」という記述です。『大鏡』とは文徳天皇（嘉祥3年・850）から後一条天皇（万寿3年・1026）に至る天皇家と、冬嗣から道長にいたる摂政関白を独占した藤原家の世継ぎをとり上げた書物です。

「内大臣鎌足の大臣、（天智天皇から）藤氏の姓を賜わり給ての年10月16日うせ給いぬ。御年五十六。大臣の位にて二十五年。この姓の出てくるを聞きて、紀氏の人いひける。藤かかりぬる木は枯れぬる物なり。いまぞ紀氏はうせなんずるとぞのたまいける。まことにこそしか侍れ」鎌足が天智天皇から藤原姓を賜ったのは669年。時の天智天皇の側近には4人の参議が仕えていました。鎌足と並んで紀大人も大臣でした。「藤かかりぬる木は枯れる」「この姓の出てくるを聞きて、紀氏の人いひける」といった人物はこの紀大人だと想定できますが、この表現は、鎌足に対して紀大人は同僚の親しみをもって称賛したか、または、冗談めかして自らを卑下したか。当時の状況（木が枯れてしまった姿）を言ったことではなさそうです。

時代は少し下って文武天皇の時代には、鎌足の息子・不比等が主導した大宝令が施行されましたが、6人の参議のなかに紀麻呂も名を連ねていました。6人のうち紀麻呂を除く5人が、のちに『竹取物語』に登場します。

かぐや姫に求婚し難題を受けて笑い者になる大臣5人の姿が描かれています。



なかでも不比等と思われる車持皇子については、その狡さ<sup>ず</sup>と人物描写の強烈さによって紀氏の恨みを受けた藤原氏の立場を風刺していると後世の人々が評しています。

『竹取物語』の作者は紀貫之ではないかという推測も藤原氏と紀氏の関係をあらわす「藤と木のからまり」が念頭にあっての指摘かもしれません。『大鏡』が世に出たのは、鎌足の時代から400年後のことです。それは、貞観8年(866)宮殿の正面にある応天門が放火で炎上し、この放火犯人をめぐって伴善男が政権から追放されるという「応天門の変」によって大伴氏と同時に紀氏も藤原氏によって政界から追放されて以降のことになります。『大鏡』の筆者はこの事件を見据えた人々の談話を基に綴ったと思われます。

事実関係はどうなのか。紀氏と藤原氏のかかわりは少なからず濃密だったようです。なかでも、奈良の廃寺(紀寺・璉城寺)を再興した紀有常の妻は藤原冬嗣の妹でした。

冬嗣についていえば『水鏡』に平安初期(弘仁4年・813)に「わづか3〜4人」となった一族の繁栄を祈念して興福寺の一角に南円堂を建てたと書いています。この藤原家の衰亡ぶりは多分に謙遜していると思えますが、藤原氏と婚姻関係を結んでいた紀氏の繁栄ぶりとそのからみ合いがうかがえます。

有常の妻の名前は時姫といったようで在原業平を祀る「在原寺」(天理市)の境内に「姫丸神社」があり、ここから東へ五キロほどの平尾山にも「姫丸神社」が祀られています。姫丸は藤原内麻呂の娘、冬嗣の妹であって、紀有常との間に生まれた姉妹は業平の妻「井筒姫」であり、妹が「古今集」や「百人一首」で有名な藤原敏行の妻というわけで藤原家の血筋を色濃く伝える女性ということになります。この神社の創建には藤



原家が関わっているかもしれません。

在原業平といえば『伊勢物語』です。その101段に次の文章があります。「昔、業平の兄(左兵衛督)が藤原良近(佐中弁)を主賓に招いて宴を開いた。その席にみごとに白藤の房が垂れていた。それを指して歌を詠んでいた。そこへ業平が現れたので歌を所望した。業平の歌はこんな歌だった。

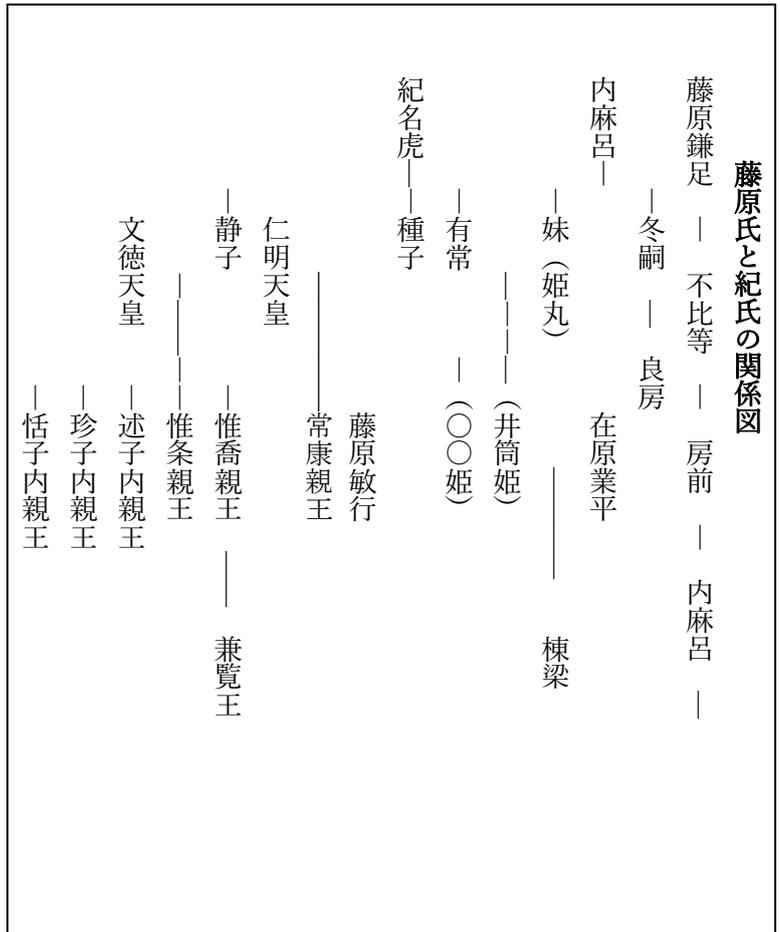
**咲く花の下に隠くる人を多みありしに勝る藤の蔭かな**

人々は歌の意図を問うと、太政大臣(良房)が栄華の絶頂にあり、藤原家が繁栄している様を詠んだと答えた。それで一同は非難しなくなったということですが、主賓の藤原良近の顔色をうかがったと思われます。

これが『伊勢物語』の原文ですが「花の下に隠れた人が多い」とは、藤原氏の繁栄の陰に圧迫され排除される弱小氏族が多いですよという意味もあり、藤原氏に対する媚と風刺のどちらが強かったか。いずれにしても業平の感性を示していると目崎徳衛氏が『日本詩人選・在原業平』に書いています。

藤原氏と紀氏のかみ具合が次の系図でも明らかです。

藤原氏と紀氏の関係図



この図で、とくに藤原冬嗣と紀有常の関係、在原業平と藤原敏行の関係をみると義兄弟という姻戚の交わりになることです。

『大鏡』は、200歳まで生きた翁の昔語りであって、天皇家と藤原家の世継ぎを中心とした書物ですが、「古今集」や「続古今集」などの歌を取り混ぜて語っています。その中に村上天皇の代に天皇の居所である清涼殿の前の梅の木が枯れたので侍従たちに良木を探させ、西の院にあった良木を移植させたらその木に歌をつけられていた。

勅なれば いとも畏し 鶯の宿はと

問はば如何にこたへん

この歌は、紀貫之の娘が詠んだ「鶯宿梅」として知られています。こう

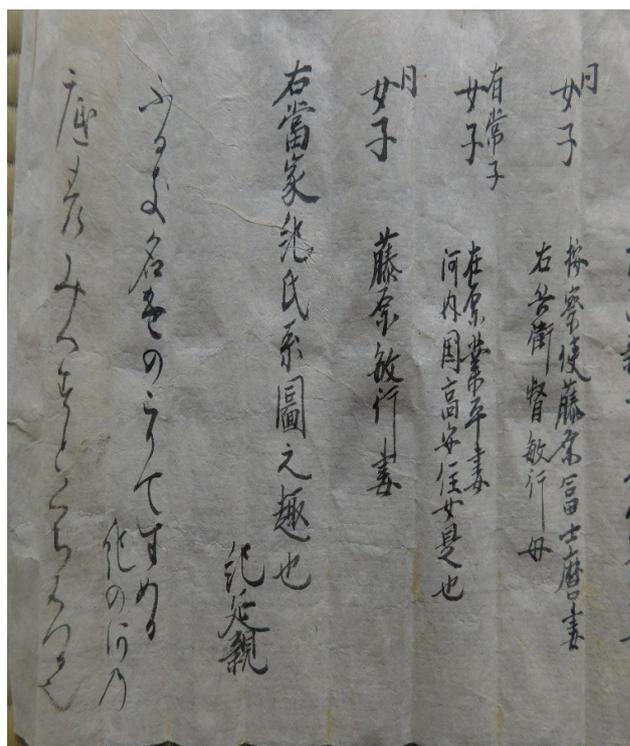
した藤原氏と紀氏の濃密な接触がある反面、歴史的事実として朝廷のなかでの高級官僚は時代が下るにしたがって藤原氏が独占していきます。この歴史的事実は否定しがたいものであって、紀氏は下級官僚に甘んじざるを得ませんでした。つまり「藤に絡まれた木は枯れる」時代になったのでした。

この事態のなかで紀氏の氏寺「璉城寺」の盛衰が思いやられます。日本に仏教が伝来して数百年。藤原氏全盛の時代に釈迦の滅後2500年の「末法の時代」がやってきます。ちょうど「望月の欠けたることなし」とうたった道長の時代です。

「末法」をどう乗り切るか。人々の涙ぐましい努力が後世に伝わっているなかでも突出しているのが藤原道長の事績です。浄土世界を体現する寺(無量寿院↓法成寺など)をいくつも造り、百体の仏像供養、「法華経」や「阿弥陀経」を自ら書写して納めた経筒を吉野の山奥に埋納するなど、権力と財力の限りを尽くして末法を乗り切ろうとしたのでした。その係累につながるのが、長男・頼道が造営した平等院であり、娘の上東門院の心の悩みお聞きになって恵心僧都が白色阿弥陀像をつくったと伝える、白色阿弥陀立像が璉城寺のご本尊となっています。

璉城寺のご本尊がどうして京都から奈良に移ったのかという記録は一切見つかりませんが、寺に所蔵する「璉城寺縁起」にはいくつかのヒントはうかがえます。これは別の機会に譲るとして、いまは「縁起」に収録されている「系図」について取り上げたいのです。

「系図」の末尾に「右当家紀氏系図之趣也・紀延親きののぶちか」とあって、最後の筆文字が「ふるき名をのこりてすめる紀の河の底 寿ことほぎ道を照らさん」と読めそうなのです。



この部分は「璉城寺縁起」系図の末尾です。

注目したいのは、系図を制作した紀延親という人物です。紀延親は紀古佐美（桓武天皇の時の征夷大使）から31代目の子孫であって、「手向山神社・神主」と別の系図に注記されて出てきます。そして紀延親の一派の祖先には「春日社神部」や「神主」「神司」の肩書がみえます。

「延親」は江戸時代の人物ですが、祖先にあたる紀氏一族には石清水八幡宮を勧請した行教、空海の高弟・真済、鎌倉時代に東大寺の大仏を再興した重源など、宗教界に名をはせた重要人物がキラ星のように活躍しているのを見逃させません。

「古き名を遺りて住める紀の河の底 寿ぎ道を照らさん」と書き記した紀延親の心境を推察すると、「藤にからまれて巨木は枯れたが、それ以前のご先祖は幾多の星霜を耐え抜いてきた。そのご先祖に感謝の念をもって寿ぐ次第です」といつているようです。

## 編集後記

新年おめでとうございます。二年続きのコロナ禍のもとで、皆さんどうお過ごしでしょうか。正月を迎えると、むかしは数え年がありました。当通信は2005年5月が創刊なので今年は17歳になります。高校生というわけです。成長はともかくとしても続けてこられたのは皆さんの支えによるものと感謝しています。

ご住職の巻頭言にあるように、何事もコロナに左右される世の中です。そのなかで通信の編集はどうあるべきか。大した抱負はありませんが、マンネリは避けたいものと念じています。さてその評価はさておき、この号掲載の「京終さろん」について思うこと。

10月登場の渡辺さんは懐かしい人です。「南都古社寺研鑽会」は数年前に解散しましたが、璉城寺の5月の特別拝観にご協力いただきました。お話のなかで思い出したのは、テーマに関連して、璉城寺のご本尊阿弥陀如来が江戸時代に京都養源院大仏で一か月間開帳した記録があること。観音立像が近年（2000年）東京国立博物館で展示されたことなど、開帳されていることでした。人々の望むところへ阿弥陀さんも観音さんも顔を出されています。

10月の徳融寺の阿波谷さんのお話で「木寺の源覚禅師…」が絵巻に出てきます。この「木寺」を調べると、京都・仁和寺の塔頭でした。「きでら」ではなく「もくじ」と称したようです。璉城寺の前身「紀寺」とは関係なさそうですが気になったことでした。

11月の清酒「風の森」のお話は古くから人類に親しまれた酒の世界に新風を吹き込んだ感じでした。コロナ禍でなければ、講演の後の食事で「風の森」が試飲できたかも知れないのに…。これが残念でした

(野尻幸男)